ヲ失ヒ之ヲ實驗スル能ハザリシヲ憾ム次ニ百九十五度乃至二百〇二度ノ部分ハ實ニ非常ニ多量ニ存在セリ若シ此部分ニシテ樟腦及ビ「テルペーン」ノ混液ナリトセンニハ數回蒸餾ノ間ニ漸次劃溫スベキ理ナレトモ容易ニ然ルヲ見ズ或ハ一種ノ成分ノ存在セルナキヤヲ疑ヘリ故ニ余ハ「リナロール」Linaloolニ就テ試驗セルモ好成績ヲ得ル能ハザリ、キ但シ此餾液ハ分極光線器ニ於テ百mm管ニアリテ右旋性四度四十八分ヲ示シ比重ハ十五度ニアリテ、〇九〇五六ヲ有スルモノナリ

臭油ノ成分ニ關シ研究スベキ餘地尠シトセズ而カモ余ハ既ニ材料ヲ有セズ之レヨリ以上ハ研究ニ便ナル識者ノ教ヲ待タンノミ終ニ臨ミ下山博士ノ指導ヲ謝ス

○賣藥調查報告（第八回）

The report of examination of patent medicines. VIII. By S. Iguma.

生熊關三郎

本報告ハ次ニ掲クル賣藥赤雀丸ノ調查報告ナリ

供試檢品

内務省
免許 赤 雀 丸

●主治効能

（定價一錢）
（金貳拾錢）

脚氣、水腫、肺病、癩麻質斯、腐骨疽、流注毒、癰、疔、便毒、癩病、眼病、胃病、痰飲、梅毒、淋病、帶下、疥癬、小瘡、一切皮膚毒下シ

●用法

大人は夜一服酒をあつくわかつて吞むべし又酒きらいの人は白湯にて吞むべし小兒十五歳より十歳迄は大人の二分の一を用ひ十歳より七歳迄は大人の三分の一を用ひ七歳より四歳迄は大人の四分の一を用ゆべし且つ服藥中は水を吞み水にて顔面手足を洗ふ事を禁ず尙又重症の病氣にして貳服三服五服七服を用ゆるときは一夜二夜休み翌夜用ゆべし

●附錄

一肺病を治療するときは漢方の煎藥肺癰門の桔梗湯を本劑とし兼用劑として此赤雀丸を量目一分宛毎夜白湯にて服用する時は必ず根治す數年來の經驗充分にて最も有効なる妙藥なり

本家 醫士

某

製

島根縣石見國邑智郡川下村

大阪取次所

某

大阪市西區九條町常盤橋筋

廣島取次所

某

廣島市猫屋町百四番屋敷

松江市末次本町

松江取次所

某

前記ノ賣藥三包ヲ取り驗スルニ各包孰レモ丸粒十三粒ヲ有シ一包ノ重量ハ平均二、〇五〇ニグラムニシテ丸粒ノ外部ニハ白色ノ粉末ヲ附着シ内部ハ黑色ヲ呈シ微ニ香氣ヲ有シ味ハ微ニ苦ク後著シク辛刺ナリ

成績

本賣藥赤雀丸ヨリ瀉下成分トシテ毒藥ニ屬スル巴豆油ヲ驗出シ且ツ私ニ功能用法用量ヲ改更セリ而シテ本丸粒ヲ粉碎シ數回硫化炭素ヲ以テ浸出シ其浸出液ヲ取り蒸發シ湯浴乾燥器内ニ乾燥シテ秤量セシニ浸出物ノ量左ノ如シ

供試驗量	同上ノ重量	浸出物ノ量		
		以上ノ丸粒ヨリ	一	包ノ量
六粒	〇・九一七九 ^瓦	〇・〇七四五 ^瓦	〇・一五七七 ^瓦	八、一一六
七粒	一、〇〇八八	〇・〇八六二	〇・一七六六	八、五四五

試驗方法

硫化炭素ニヨリ浸出シ得タル淡褐黄色油狀物ニ就キ生理的試驗ニヨリ認定セルモノニシテ其方法

順序等ハ略シテ掲ケス

參照

本賣藥赤雀丸ハ明治二十七年五月十五日島根縣ニ於テ免許ヲ得タルモノニシテ其配伍藥ハ左ノ如シ

楊梅皮末 二匁

當藥末 一匁五分

百草霜末 七分五厘

胡榘末 三分七厘

樟腦 三分七厘・(但一周間量ニシテ四匁九分九厘)

以上五味爲細末飯ヨテ煉瓦子惣數三百七十八粒一日量五十四粒二包ニシテ二十七粒宛、朝夕白湯ニテ用ユ、小兒十五歲ヨリ七歲迄大人ノ半分量用ユ、小兒七歲ヨリ四歲迄量大人三分ノ一用ユ

主治 食腸、服痛

附記

前記セルカ如ク本賣藥赤雀丸ハ毒藥巴豆油ヲ配伍シ且ツ効能用法用量ヲ私ニ改更セルヲ以テ本營業者ハ罰金二百十五圓ニ處セラレタルヤニ聞ク

學事彙報

○「ナフトール」ノ検査法ニ就キテ

(Pharm. Ztg. No 2, 1903)

(平山)

嘗テヨリスセン「Jorissen」氏カ「ベタナフトール」中ニ於ケル「アルファナフトール」ノ検査法トシテ推